

日本における宗教とは

岡本亮輔. 2021.

『宗教と日本人: 葬式仏教からスピリチュアル文化まで』

東京: 岩波書店.

愛知県立大学大学院国際文化研究科日本文化専攻博士前期課程

杉江綾乃

日本人は無宗教である、と語られる場面は少なくない。確かに現代の日本では、宗教の存在感はあまり大きくないだろう。しかし、冠婚葬祭や寺社への参拝など、日本人が宗教に接する場面は日常生活の中に依然として存在している。日本人と宗教の関係は、無宗教という一単語では説明しきれない複雑さを内包している。

本書は、宗教と日本人の複雑な関係について、「信仰」「実践」「所属」という三つの要素に着目し、宗教とよばれる広範な現象に一定の見通しを与えるものである。著者は、宗教学・観光学を専攻する北海道大学准教授の岡本亮輔氏である。

本書は、「まえがき」、序章、第一章から第五章、終章から構成されている。

「まえがき」では、「宗教と日本人の複雑な関係を解きほぐす」(p.i)という本書の目的を述べている。日本の宗教風土では、信じる・信じないという以前に、何が信じるものであるか、それほど明確ではない。したがって、キリスト教をモデルにした信仰組織を中心とする宗教論から脱却し、実践や所属という要素に注目しながら日本人と宗教の関係性を考察する必要性を述べている。

序章「世俗社会の宗教」では、日本と欧米を比較しながら、日本はなぜ無宗教が圧倒的多数を占めるのかを考察している。近代化とともに、組織的な信仰が衰退する一方で、宗教組織に結びつかない宗教のあり方が増加する傾向は、日本・欧米ともに指摘できる。しかし、教え(信仰)を軸とする欧米のキリスト教に対して、日本の伝統宗教は信仰体系の受容を強く求めないため、明確に言語化できる信仰が見出しにくいことを指摘している。

第一章「宗教の分解—信仰・実践・所属から読み解く—」では、従来の信仰中心の宗教論ではなく、宗教を信仰・実践・所属という三要素に分解して考察するという本書の基本視座を述べている。日本の宗教にみられる特徴は、初詣などに見られるように、信仰を強く重視しない「信仰なき宗教」という形に求められる。したがって、日本人と宗教の関係を捉えるには、信仰だけではなく、実践や所属という要素にも着目する必要性を述べている。

第二章「仏教の現代的役割—葬式仏教に何が求められているのか—」では、信仰なき宗教の典型例として葬式仏教を挙げている。多く人は、葬式を宗教儀礼ではなく、人間関係の儀礼と捉えており、確固たる信仰によってではなく、死者への思いという漠然とした情緒に基づいて葬式は実践されている。葬式仏教は、長い時間をかけて日本に定着した儀礼の実践であり、信仰とは連動せずに機能を有するものであると述べている。

第三章「神社と郷土愛—パワースポットから地域コミュニティまで—」では、神社の公共性に注目しながら、神道と神社について所属要素を軸に考察している。本章では政教分離訴訟を例に挙げ、神道は個別の宗教には収斂しない広い裾野をもつという主張がなされることが多く見られる点に注目している。神道は、信仰要素は弱い、地域・国家・民族を対象とした、「漠然とした信仰なき所属感覚」こそ最大の特徴であると述べている。

第四章「スピリチュアル文化の隆盛—拡散する宗教情報—」では、占星術・超能力などのスピリチュアル文化は、所属要素が希薄であり、個人が信仰・実践の主体となる点が特徴であると述べている。また、宗教組織による信仰・実践の独占を突き崩すものであると考察している。加えて、現代の社会文化に親和的な信仰や実践を主体的に選択することができるようになり、宗教の再構築という面も合わせ持つと述べている。

第五章「世俗社会で作られる宗教—エリアードを超えて—」では、ミルチャ・エリアードから始まる宗教シンボル論の系譜をたどりながら、他者の信仰を推し量ろうとすればするほど、ありもしない信仰が生み出される現象を述べている。宗教シンボル論には、シンボルから信仰を推し量るなかで、現代人の主観や思想が反映されるという限界性があると指摘し、また他者の信仰を理解する難しさにも触れている。

終章「信仰なき世界のゆくえ」では、宗教を信仰・実践・所属の三要素に分解するという本書の視座と様々な宗教論を比較しながら、今後の宗教を考える上での指針を示している。宗教市場が教団主導から消費者優位へと変化した現代では、宗教側が積極的に自分たちの実践が世俗で有用な道具であることを強調し、宗教は世俗社会の文化としての性格を強めていくだろうと述べている。

本書の論点は二点あると評者は考える。一点目は日本と他国の比較の仕方、二点目は視認できるものに着目することである。

一点目「日本と他国の比較の仕方」について、本書では日本と欧米を比較して論じられている場面が多く見られる。両者を比較するうえで重要な点は、主に二つあると考える。一つ目は、教え(信仰)中心のキリスト教と、何を信じるかあまり明確でない日本の伝統宗教を比較するために、キリスト教徒が多く占める欧米を比較対象としたことである。第一章では、聖書に基づいて整備された行動規範と価値観をまとめたカテキズムと呼ばれる教則本を例に挙げ、様々な問題について信者がどのように振る舞うべきかを明快に指し示していることを述べている。このように、教え(信仰)が明確化されているキリスト教を信仰する人々が多く占める欧米と比較することにより、現代日本の宗教において「信じるものが明確でない」のは何故かという理由が明らかになるだろう。二つ目は、宗教がもつ社会的な位置に注意しながら比較していることである。序章ではサウジアラビアを例に挙げ、社会と宗教の距離が日本と異なることを述べている。また両国の社会と宗教の距離感が異なることから、サウジアラビアと日本の宗教を「同時代というだけで比較するような議論は避けるべき」(p.7)であると述べている。本書では、ただ日本と欧米の宗教を比較しているのではなく、宗教の社会的位置という規準に基づいて比較しているのである。このように、比較検討をする際に、両者の相違点だけでなく共通点も含めて検討するという手法は、宗教だけに留まらず、他の事例を比較するにおいても重要であろう。

二点目「視認できるものに着目すること」について、本書では現代の宗教を考える際には、見えない信仰ではなく視認できる実践の消費過程や環境に着目するべきであると繰り返し述べている。このような視点から、宗教を信仰だけでとらえるのではなく、実践・所属を加えた三要

素を軸に考察しているのが本書の特徴である。信仰は目に見えず、客観的に把握することはできない。客観的に捉えるためには、実践や所属形態など、目に見えるものを用いて考察する必要がある。宗教という概念自体は信仰中心のキリスト教を軸にしており、「非合理の象徴ともいべき」(p.vi)のものであると述べているが、この非合理的な宗教を合理的に理解しようとする著者の姿勢は、まさに合理化が進む現代社会によって規定されているといえるだろう。

本書は日本人と宗教の関係について、著名なテレビ番組や御朱印集めなど、何気なく接している宗教を例に挙げることで、読者に多くの気づきをもたらす構成となっている。また、身近な事例だけではなく、他の研究者の研究成果を多く引用し、宗教そのものの知識を深める一助ともなるだろう。本書を通じて、見過ごされてしまいがちな現代日本の宗教に触れることは、日本人と宗教の関係性を考える上で、視野を広げる基礎となるだろう。